

受験番号					
氏名					

二〇二三年度 教育学部 転科・転専修試験 問題用紙

「小論文」 国語国文学科

No. /

【問題】 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

日記文学をどう理解するか。内質の生成に即した要約を、例えば『蜻蛉日記』で試みる。

王朝女流日記文学の始発でもあり一つの達成をも示す『蜻蛉日記』上・中・下三巻。上巻では、夫兼家との贈答歌を結婚後十五、六年以降に整理し始めたとき、意にそわぬ思いを抱えながらの理不尽な結婚生活の実相が、『日記』をまとめていくに従い看過しがたい経験として認識され、周囲の人々には、まま見受ける夫婦の形姿と映ったであろうその表層的事実や出来事の奥に、『日記』に形象されたことくあり続けたはかなくむなし人生の真実が創造的に紡がれてくる。続く中巻は、苦悩からの脱出

をそれ以外にあり得なかったものとして呈示する日記文学書となつていくと、改めて認識させられる。

このいわゆる「家の女」に創出された日記文学作品に対して、ここに取り上げる『紫式部日記』について、宮崎庄平氏は「女房」「女房」紫式部の書いた「女房日記」の伝統を先蹤とした日記作品・「日記文学」であることを、成立論や内質論等を縦横に展開・進展させながら繰り返し力説されてこられた。以降、『紫式部日記』の作品論に、「女房日記」の性格をベースに考察する論が、意識の仕方に深淺はあるものの見受けられるようになった。宮崎氏が情況の記録といわれる、特に前半部の慶祝記部分等を考えれば、本日記の性格から重要な視点であろう。しかし『紫式部日記』を理解するうえで、その伝統を踏まえつつも「女房日記」ではなく「日記文学」として受け止めるべきという氏の理念的方向性がそれとして示されてはきたものの、「女房日記」と日記作品としての受容の境界あるいは境界の付け方、いわば「女房日記」と「女房日記文学」とをどう分別して本日記の内質を読み解いていけばいいのかわからないならそれも一つの立場であるが、複雑な内面性を抱える作品だけになかなか厄介である。実際、「女房日記」的性格に意識をシフトさせると、論の追究に詰まるような場合その女房日記性に解を求めて、本来の「日記文学」としての掘り下げから予先がずれ論の分離を招くことにもなりかねない。

を試みれば試みるほど懊悩がひたすらに深刻化、むしろさらなる絶望に突き落とされ続けるが、次第にそれらの体験を通して、打ちのめされるだけの状況から何とか自己を立ち上げらせ、生きる痛苦をわずかずつでも克服していく人間認識のまなざしが獲得され人生観照が深まる。下巻はその位境のもと周囲に目を向け、養女迎え、道綱の交際、床離れ、養女への求婚などを身辺雑記風に綴り、透徹した人生認識や物語の距離感を保つ表象に、苦悩に満ちた人生を静かに俯瞰できるようになった人間的な到達を見せてくる。

日記文学性の生成を視座に仮にこうまとめてみると、この作品が事実を記録する日記ではなく、書き紡がれることによつて文字通りその体験なり出来事なりの内質が次々に発酵を重ねて醸成され、その経験の奥に蔵存した道綱母の人生の真実

知られるように、紫式部に鯛好きという伝承があるからでもないが、「鯛」つながりで、金子みすゞの「大漁」を目にしたら式部はどう思つたであろうかと考えた。

朝焼小焼だ 大漁だ 大羽鰯の 大漁だ。
浜は祭の ようだけど 海のなかでは 何万の 鰯のとむらい するだろう。 昔

魚屋でふつうに手に入る「鯛(A)」、これは日常語・生活用語レベルのいわゆる鯛。「大漁」前半の「鯛(B)」(作中は「鰯」だが「鯛」を用いる。以下同)は食料であり売れば生活の糧にもなる大切な喜びの獲物。一見、そのことばとしての役割は「鯛(A)」と同じである。後半の「鯛(C)」は漁の犠牲となった何万もの命の徴表。一網打尽に捕えられ浜に上がった累々たる鯛を逆照射、慈しみとえも言われぬ悲しみ理不尽への憤りが静かにそれだけに深甚に訴えられてくる。この「鯛(B)」が「鯛(C)」にかく対置される時、みすゞの詩想の中で「鯛(B)」は日常語と形は同じでも「鯛(A)」とその役割が同じではありえない。浜の人たちの欣喜雀躍する様子をひたすら表象するこの大漁の「鯛(B)」は、喪に服す海中の悲しみとは無縁の歓喜を形象する日常語性を超えた選び取られた詩語であり、「鯛(C)」とあいまって何とも息が詰まるほどに重苦しい詩的時空を創出する文学レベルのことばとして自立している。

「小論文」 国語国文学科

受験番号					
氏名					

仮にこの「大漁」に、前半後半をつなぐ「浜は祭の よう
だけど」がなければどうなるか。

朝焼小焼だ 大漁だ 大羽鰯の 大漁だ。

海のなかでは 何万の 鰯のとむらい するだろう。

問題意識だけがデジタルな形式に先鋭化した、詩人の価値観
むき出しのシニール感だよう過激な詩ともなりえよう。そ
れだけに「浜は祭の ようだけど」のつなぎコトバとしての
役割の大きさが分かる。幼い頃からこの風景に親しんでいた
みすゞにも、浜の人たち同様に喜んで見ていた時期もあり、
活気あふれる町が好きだった^{（金子みすゞ）}という。そういう中でも、
若くして彼女の中では後半の詩想を伴わずには見られない情
景に委容していったのであろう。そのやさしくやわらかなま
なざしや感性を思うとき、27歳で自ら命を閉じるまでに追
い詰められた理不尽で不条理な結婚生活が、いかほど痛切に
その魂をさいなんでいったか思いやられる。ともあれ、この
前半後半をつなぐ「浜は祭の ようだけど」の明から暗への
転回は、詩人として注目され活躍を始める夢あふれた生活か
ら、結婚を境に苦渋にさいなまれるだけの生の営みへと、人
生認識・社会認識をその方向に転換させるほかなかった悲運
の予兆のように、そこにそう生きざるを得ない「鰯」の宿命を、
自己のそして人間存在の悲しみを重ねるごとく示しているよう。
その人生にも喜び多き楽しい時期がありそれはそれで嬉しい
ことに違いなかった。しかし次第にそれだけではない人生に
目覚めて気付くこの世の摂理と真実。「浜は祭の ようだけ

ど」という肯定から否定への短くもアナログにつながる一節
には、彼女の詩想を湧き上がらせる内なる発酵の眩きがしか
しはつきりと響いている。

金子みすゞの詩想の生成とその世界性をこう取り上げたの
は、その想念と同質の発酵音を『紫式部日記』にも聴くこと
ができると考えたからである。本日記の「女房日記」と「女
房日記文学」の境界問題や内質を再検討するときに、みすゞ
の詩想を補助線として一本引いてくると、「女房日記」を意識
する束縛からゆるやかに解放されて、一つの日記文学作品と
してその性質が捉えやすくなるように思われる。

（渡邊久壽「『紫式部日記』内想の生成―その発酵音を聴きながら―」より）

問一 筆者は、「女房日記」と「女房日記文学」との違いをどのように考えているか。金子みすゞの
例を参照して説明しなさい。

問二 本文にある『蜻蛉日記』『紫式部日記』と同時代に書かれた他の日記のうち、知っている作
品名を全て挙げ、その作者名、成立時期、内容、表記・文体・表現等の特徴について説明し
なさい。

← ここから記入すること

1997

ここから左には記入しないこと